

## 2026年第52回木曾音楽祭 『聴きどころ』

国内では唯一の「室内楽の愉しみ」に染まる音楽の祭典、木曾音楽祭。今年の木曾音楽祭はヨハン・シュトラウスⅡ世の《喜歌劇『こうもり』序曲》での幕開けです。寺嶋陸也による編曲の管楽合奏版で、まるでシャンパンの栓を開けるような意気の良い連打で始まります。初日2曲目は、ピアノと弦楽器による室内楽のまさに王道、ブラームスの《ピアノ四重奏曲第3番ハ短調 作品60》。この曲と同じ「ハ短調」といえば、有名なのはベートーベンの「運命」交響曲ですが、このブラームスの四重奏曲からも『運命の動機』が聴こえてきます。木曾音楽祭メンバーならではの重厚かつ奥深いアンサンブルがお聴きいただけることでしょう。シューベルトの《八重奏曲 へ長調》は、腰を据えてゆったりと。これまで木曾音楽祭でも幾度も取り上げられてきた室内楽の名曲中の名曲です。全体を通じて流れる温かい響き、溢れる歌心、シューベルトの斬新さ優しさが凝縮された素敵な音楽です。

二日目、アーサー・ブリスの《オーボエと弦楽器のための五重奏曲》ですが、私はこの曲を含むイギリス近代音楽には共通して、羽虫舞う草原の香りを感じます。皆さんはいかがでしょう？メンデルスゾーンの《弦楽五重奏曲第2番 変ロ長調 作品87》は、4つの楽章からなる、弦楽器だけの小さな交響曲のような作品です。「メンデルスゾーン節」とでもいうような節回しが楽器間で快活にやりとりされ、特に最終楽章の無窮動には目も眩むほどです。そして今年プログラムの中でもっとも辛口かもしれません、メシアン《世の終わりのための四重奏曲》は、フランス軍の兵隊であったメシアンがドイツの捕虜として収容された時に、偶然出会った4人の音楽家のために作曲されました。その収容所は音楽家には寛容で、特別な部屋を与えられたメシアンは作曲活動に集中することができ、また収容所内の講堂で行われた初演時には、グランドピアノを取り寄せてもらえたそうです。メシアン特有のリズム、和声と音階の色彩、鳥の声、宇宙の果てまで連れていかれるような時間感覚を感じられるのではないかと思います。

第三日目の幕開けは、テウイレ《ピアノと管楽器のための六重奏曲 変ロ長調 作品6》を。初演は1889年、ドイツの温泉保養地ヴィースバーデンの音楽祭でした。全曲を通じてピアノとホルンの馥郁たる響きが美しいロマンティックな音楽です。モーツァルトの《ピアノ三重奏曲 ト長調 K.564》は晩年の作ですが、明るく軽快さが美しい作品。木曾音楽祭に長く登場してきた加藤知子、辻本玲、津田裕也の親密な音楽対話が聴かれることでしょう。ショスタコーヴィチ《弦楽四重奏第8番 ハ短調 作品110》は、続けて演奏される5つの楽章を通して、彼のイニシャルである「D・Es・C・H」が執拗に引用されており、彼のファシズムへの反抗、戦争の犠牲者への祈りが色濃く聴かれる傑作です。

そして今年の木曾音楽祭を締めくくるのは、シューマンと同時代の最高峰のヴァイオリニストでもあったシュポアによる《大九重奏曲 へ長調 作品31》です。木曾では異なるメンバーによってたびたび演奏されてきましたが、今回も管楽器と弦楽器の名手によってヴィルトーゾ、カンタービレが音楽祭を締めくくるに相応しく華やかに響くことでしょう。

今回は、スイス・バーゼルで学び国内外で活躍しているクラリネット奏者田中香織と、フランス・パリで学び東京フィルハーモニーの首席ヴィオラ奏者として活躍している小峰航一という初登場の二人にもご期待ください。

夏の木曾の風物詩「木曾音楽祭」ならではの名手たちによる室内楽、木曾駒高原の風と音楽に包まれ、ゆったりとした三日間をどうぞお楽しみ頂けますように。